

旧林兼商店の創生期を検証する

— 中部幾次郎と廣瀬始の軌跡を中心に —

岸本 充弘⁽¹⁾

〈 要旨 〉

我が国のかつての3大捕鯨会社であり漁業会社である旧林兼商店（のちの大洋漁業、現・マルハニチロ株）の創生期の状況を、林兼商店発祥の地である兵庫県明石市において行った聞き取り調査等を交えながら、創立者である中部幾次郎と廣瀬始の軌跡を中心に辿った。

I. はじめに

1 研究の目的と背景

筆者は、「下関における鯨産業発達史」⁽²⁾及び「関門地域における鯨産業・鯨文化形成メカニズムの一考察—その将来展望を視野に入れて—」⁽³⁾等により、下関における鯨産業の検証を行ってきた。下関における近代以降の鯨産業は、1899（明治32）年に日本で初めての近代式（ノルウェー式）捕鯨会社であった日本遠洋漁業株が長門に本社を、下関に出張所を設置したことに始まるが、昭和初期に、当時の共同漁業（後の日本水産）と日本産業グループの傘下に入る日本捕鯨が北九州・戸畑に移転後、1924（大正13）年、明石出身の中部幾次郎が個人商店として設立した林兼商店の、下関を根拠地として規模を拡大したことが、下関を国内有数の水産都市として発展させた原動力の1つであったと言っても過言ではない。特に1936（昭和11）年に南氷洋捕鯨に進出後、日本3大捕鯨会社の1つとして「くじらのまち下関」を支えたのも旧林兼商店（後の大洋漁業、現・マルハニチロ株）並びに旧林兼商店の関連会社であった。その林兼商店に関する資料収集の過程で、下関在住である筆者の親類から、旧林兼商店の設立時期に明石より中部幾次郎とともに下関に居を移し、林兼商店設立に尽力したという廣瀬始の存在について情報を得た。しかしながら、予備調査の段階では廣瀬始に関する資料が皆無に等しく、旧林兼商店設立に携わった中部幾次郎との関係もはっきりしなかった。そのため、廣瀬始に関する軌跡を改めて辿るとともに、林兼商店創生期についての検証を行うため、下関市立大学付属地域共創センターの助成を受け、2014（平成26）年8月に中部幾次郎の出身地であり林兼商店の発祥地である兵庫県明石市で、聞き取りや資料収集等の現地調査を行った。

II. 旧林兼商店の創生期を辿る

1 旧林兼商店を設立した中部幾次郎と明石

旧林兼商店創立者である中部幾次郎の出身地兵庫県明石市は、神戸市に隣接した人口約29万人の都市で、東経135度日本標準時子午線上にある海陸交通の要衝でもある。また、瀬戸内海、明石海峡に面し、潮の流れが速く好漁場であることから明石の鯛、タコなどの水産物や水産加工品も有名で、明石沖で獲られた鯖や鱈



写真①

などの新鮮な魚は、江戸期から大消費地である大阪へ運ばれていた。このような漁業のま



写真②

ち明石で、中部幾次郎は、1866（慶應2）年1月4日に明石城下の播磨国明石東魚町⁽⁴⁾で生鮮運搬卸業を営む中部兼松、みつ夫妻の6人兄弟の次男として出生する。元々中部家は明石郡林崎村で漁業を営んでいたが、城下に近い町中の東魚町に移り魚商を始めたという。社名である林兼の由来も、林崎出身である父の兼松の名前から付けられたものである。私も当初

の中中部家の活動拠点であった林崎漁港を訪ねたが、折しも台風の接近に伴う休漁のため、遠く明石海峡大橋を望む漁港内には多くの漁船が避難し、



写真③

写真④

岸壁にしっかりと繫留された状態で、人影も殆ど見られなかった（写真①）。きちんと整備された林崎漁港には、中部家の創業等に関連する石碑や説明版等の痕跡は無

かったが、近くには林兼のルーツにもなった林町の町名が残っている（写真②）。その後明石市の中心部に移動し、中部幾次郎が生まれ、林兼商店の所在地でもあったかつての東魚町十四番地を確認したが、その場所は明石市の台所でもある魚の棚（うおんたな）市場（写真③）の中にあり、現在は呉服店西松屋の所在地となっている（写真④）。しかし現在明石市には、かつての3大捕鯨会社であり国内水産会社の大手であったマルハの創業者の痕跡



写真⑤

は殆ど無く、明石城がある明石公園大手門の入り口に立つ中部幾次郎翁銅像⁽⁵⁾（写真⑤）や旧制明石中学（現・県立明石高校）中部講堂（体育館）に僅かな足跡を見る程度である。明石市立文化博物館の釜須学芸員にも聞き取りを行ったが、「明石はマルハ創業者の中部

幾次郎の出身地で、関連する書籍等は多数あるのにも関わらず、その痕跡が街なかには殆ど無い状態で、中部幾次郎の存在すら知らない若い世代も多い。」とのことであった。林兼商店の店舗があったという魚の棚商店街の中で、明石市内でも数少ない鯨肉専門店である「鯨安（写真⑥）」を現在も営む松尾実さん（写真⑦）にも、林兼商店と中部幾次郎について伺ったが、「私を含めて世代が変わり、中部幾次郎と林兼の名前を知っている程度で、今の若い人は殆ど知らないでしょう。」という状況であった。魚の棚で水産物等の商売を営む他の数店舗でも聞き取りを行ったが、中部幾次郎の名前すら知らない方もいる状況であった。

ここで中部幾次郎の明石での生い立ちを少し辿ると、幾次郎は1873（明治6）年、8歳の時に兄甚蔵の死去に伴い中部家の家事を手伝い始め、商売の知識を学び始めたという。その8年後、父を手助けしながら四国、九州方面へ魚買出しに従事し、大阪雑喉場⁽⁶⁾へ搬入する仕事をこなしていた。当時、買付けした魚の鮮度を維持するため、魚の運搬時間短縮に



写真⑥

苦心していた幾次郎は、1903（明治36）年大阪市で開催された第5回内国勸業博覧会時に就航していた米国製発動機付の巡航船に目を付け、これを鮮魚運搬船に利用することを考え、このことが林兼商店発展の大きなきっかけとなった。その翌年1904（明治37）年には、我が国の漁



写真⑦

業界の中核場所となると考えられ、また、大陸と本土を結ぶ特に重要な場所でもあった下関に林兼商店の根拠を置き⁽⁷⁾、従来の蒸気機関に替わる我が国最初の石油発動機付鮮魚運搬船「新生丸」を建造し、近海での活動を行い大きな成果をあげる。特に幾次郎が40歳になった翌年の1905（明治38）年を林兼商店の発足の年としているのも、新造船による鮮魚運搬が軌道に乗り、会社発展の大きなきっかけとなったことへの幾次郎の思いがあってのことであろう。その1つの背景には、1883（明治16）年の日韓通漁条約の締結により当時の朝鮮沿岸での日本の漁師による出漁権が認められ、1908（明治41）年の日韓漁業協定による韓国人と同等の邦人の漁業権が認められたことに加え、1910（明治43）年の日韓併合⁽⁸⁾があった。このことは、朝鮮通漁と呼ばれ、出漁した邦人漁師の魚を買付けし、下関、大阪の魚市場に従前の半分以下の日数で鮮魚輸送をすることにより業をなすことができるようになってことが大きく影響している。そのため林兼商店は慶尚南道方魚津にも根拠を置き⁽⁹⁾、1915（大正4）年にはその場所を朝鮮漁業の本部と定め、そこを足掛かりに事業を拡大していく。さらに、幾次郎が53歳の1918（大正7）年には、土佐捕鯨⁽¹⁰⁾を買収して捕鯨業にも踏み出す。この背景には、かねてより国民の蛋白源⁽¹¹⁾

の確保に南氷洋捕鯨が必要不可欠なものであるという先を見据えた幾次郎自身の持論と、近海での国の規制を避けて南氷洋に出漁することがあったとされ、これに加えて日本一の名砲手と言われた土佐捕鯨出身の志野徳助⁽¹²⁾の進言もあったからであると言われている。

1924(大正13)年には個人経営であった林兼商店の事業を、株式会社組織に変更し、翌1925(大正14)年には方魚津の本拠を下関に移すとともに、幾次郎も下関に移り住むことになる。幾次郎71歳の1936(昭和11)年には、下関市竹崎町にあった林兼商店本社社屋を新築するとともに、かねてより調査研究を行ってきた南氷洋捕鯨に進出するために大洋捕鯨株式会社(本社:東京)を創立、捕鯨母船日新丸⁽¹⁴⁾を建造し、林兼商店として初めてとなる南氷洋捕鯨に出漁する。これが我が国における最大の捕鯨会社の幕開けでもあった。

2 廣瀬始と林兼商店

それでは、中部幾次郎とともに明石から下関に居を写し、林兼商店設立に尽力したという廣瀬始とはどういう人物であったのか。私は事前に、廣瀬始について、前述した明石市立文化博物館の釜須学芸員や明石市立図書館にも照会を行ったが、手掛かりを含めて情報を得ることができなかった。そこで、廣瀬始に関する聞き取り調査を行うために、明石市在



写真⑧



写真⑨

住で廣瀬始の次女である廣瀬てる子さんと、てる子さんの娘である、廣瀬三絵さん(写真⑧:右・てる子さん、左・三絵さん)の御自宅を訪問し聞き取りを行った。それによれば、廣瀬始⁽¹⁵⁾(写真⑨)は、1890(明治23)年、明石郡(現・明石市)上ノ丸に生まれ、実家は質屋を営んでいたという。廣瀬始と奥様ヨシさん(旧姓桶谷)の間には2女(写真⑩:右からてる子さん、ヨシさん、チヨコさんと御令息)があり、長女は桶谷チヨコと桶谷姓を名乗り、聞き取りを行ったてる子さんは次女にあたる。廣瀬始は中部幾次郎が1913(大正2)年に下関に拠点を移した後、当時の林兼商店の営業主任として明石から単身で下関に居を移し、数年間勤務していたという。筆者の親類から聞いた話では、当時の下関で中部幾次郎と廣瀬始が大八車を引きながら商売をしていたというが、具体的な勤務時期は不明であった。ただし、てる子さん(1918(大正7)年生まれ)が小学校高学年の頃に廣瀬始が下関に行っていたとのことから、大正末~昭和初頭にかけての数年間ではないかと推察される。ちょ



写真⑩

うど1924（大正13）年9月1日は林兼商店を中部幾次郎の個人事業から会社組織に変更し、本格的に事業の拠点を下関に移し、(株)林兼商店、林兼漁業(株)、林兼冷蔵(株)の3本柱とした時期であり、林兼商店として人手が足りない状況であったと推察される。てる子さんも「母に連れられて姉と一緒に下関に行った記憶がある。」という。一方、廣瀬始の奥様であるヨシ⁽¹⁶⁾さんは、大阪心齋橋にあった傘屋の1人娘で、幼いころ父親を亡くされた後、明石に来られ、当時としては珍しい革靴を履くような御嬢さんであったとのことだが、既に10代で働き始め、勤勉で仕事には厳しく、ビジネスウーマンの先駆けであったという。廣瀬始が亡くなった後、家業の米屋以外にも髪結いを営むなど商売人として勤労であることはもちろん、てる子さんを明石女学校に入学させるなど、教育熱心でもあった。

また、中部幾次郎と廣瀬始の接点については資料が無く詳細は不明であるが、廣瀬さんへの聞き取りによれば、同じ明石の住人であり商売していた者同士、旧知の仲であったのではないかということであった。それではなぜ廣瀬始は林兼商店の営業主任として、本業をおいてでも下関に行っていたのであろうか。廣瀬てる子さんや三絵さんによれば、廣瀬始は魚や水産物の商売をしていたわけではなく、もともと明石で米屋を営んでおり、何人も雇用する大店であったことから、米を掛売りしながら台帳も管理するなど商売に長けていた。そこで、中部幾次郎に商売人としての才覚を見込まれ、下関に本拠地を移した後の林兼商店の営業、経理を、当時では重責であった営業主任として担当していたのではないかということであった。三絵さん自身も廣瀬始が営んでいた米屋の痕跡として、家に大きな米櫃がいくつもあったことを記憶されている。

廣瀬始は腎臓を患い1933（昭和7）年10月29日に42歳の若さで死去したが、このときてる子さんは14歳であった。大柄であった廣瀬始は、中部幾次郎氏から「よく飯を食べる男だ」と感心されるほどの大食漢であるだけでなく、男気もあり良い父親であったという。腎臓を悪くし入院していた病床でも、当時の明石中学校が出演していた野球の試合に夢中になるなど、最後まで豪放磊落な人物であったとのことである。大正から昭和にかけて、急速に国内有数の水産会社として発展してきた旧林兼商店の急速な拡大発展を、廣瀬始のような多くの人物が陰で支えていたのであろう。

3 その後の林兼商店を辿る

1936（昭和11）年に南氷洋捕鯨に進出した林兼商店は、更に捕鯨母船第二日新丸を建造し2船団を南氷洋に送り込んだ。しかし、政府からの援助もない多額の資金を捕鯨につき込むこと自体が会社の社運を賭けた事業であったが、1941（昭和16）年には第2次世界大戦となった太平洋戦争で、所有していた捕鯨船や捕鯨母船は他の所有船舶と共に旧日本海軍に徴用され、南氷洋捕鯨は一時中断する。1942（昭和17）年9月の水産統制令⁽¹⁷⁾に基づき林兼商店は販売部門が国策会社となり、捕鯨部門は西大洋漁業統制会社の設立となる。戦後林兼商店は大洋漁業株式会社と名前を変え、敗戦後の我が国の食糧

難を救うため、中部幾次郎は当時の連合国軍総司令部（GHQ）に在京の次男中部謙吉を通じて掛け合い、小笠原での近海捕鯨実現の後、更に南氷洋捕鯨へ向けての道筋をつけ、1947（昭和21）年5月に81歳で他界する。林兼商店の本拠地や本社を下関に移した後も、中部幾次郎は生まれ育った明石に生涯住民票を置き、決して明石のことを忘れることはなかったという。中部幾次郎が、我が国の水産業の先駆けであった林兼商店の多角経営に取り組んで国内有数の規模に育て上げることができたのは、天気予報は勿論、気象学もない幼少の頃から明石の海で鍛えられた潮を見る眼であったと⁽¹⁸⁾言われている。またその後の捕鯨事業への進出や、南氷洋捕鯨への執念ともいえる取り組みで、日本最大の捕鯨会社に育て上げた中部幾次郎は、水産のみならず、海洋国家であった日本の将来までも見据え、常にたゆまない研究を続けることで、その先々を察知する眼が鍛えられていたことがこれらのことにつながっていたのであろう。また、中部幾次郎は「事業は一にも二にも人である。人は多いけれども有能な人物は少ない。」と語っており、⁽¹⁹⁾廣瀬始のように、優れた人材を見抜く眼も当然のことながら持ち合わせていたのではないだろうか。一方、我が国有数の水産会社として発展した旧林兼商店の黎明期には、廣瀬始のように史実として記録に登場しない多くの支えがあり、これらの人々の尽力があったことで、我が国が世界有数の一大水産国となったことを忘れてはならない。

Ⅲ. おわりに

我が国の水産業や捕鯨を取り巻く状況は、水産資源の減少、担い手不足、燃油高騰、魚価の低迷、新しい流通体制の構築、国際司法裁判所の我が国の調査捕鯨に対する判決等厳しい状況が続いている。かつての3大捕鯨会社、3大漁業会社としての林兼商店を立ち上げ、今は生まれ故郷である明石市の浜光明寺



（写真⑪）に眠る中部幾次郎と、幾次郎を支えた廣瀬始はどのような気持ちでこの状況を見ているだろうか。私が訪れた中部幾次郎の出生地であり林兼商店があった兵庫県明石市の魚の棚市場は多くの買い物客で賑わい、中部家が漁業を営んでいた林崎の漁港には、多くの漁船が今も変わらず漁を行っている。現代を生きる我々は、中部幾次郎、廣瀬始ら先人が多くの労苦の下に築いてきた様々な仕組み、システムのおかげで生かされていることを改めて感じる事ができた。今後も、その先人の苦勞を少し立ち止まって辿ることで、次世代に繋げるためのきっかけづくりにしたいと考えている。

(注)

- (1) 下関市立大学附属地域共創センター委嘱研究員、下関市農林水産振興部水産課
- (2) 岸本充弘「下関における鯨産業発達史」下関市立大学大学院経済学研究科修士論文、2002。
- (3) 岸本充弘「関門地域における鯨産業・鯨文化形成メカニズムの一考察 - その将来展望を視野に入れて -」北九州市立大学大学院社会システム研究科博士論文、2006。
- (4) 中部幾次郎に関しては、展望社『大洋漁業』、大洋漁業『大洋漁業80年史』、大仏次『中部幾次郎』、明石市役所『明石市史下巻』、兵庫県教育委員会『郷土百人の先覚者』、明石市教育會『中部翁畧傳』、藤本亮助『兵庫縣近世五十傑傳』、あかし芸術文化センター『明石の史跡』、財団法人兵庫県学校厚生会『明石ゆかりの人びと』、高浜直子『海翔ける中部幾次郎』、伊地知紀子『大洋漁業と朝鮮』、神戸市学会『歴史と神戸』、朝日新聞神戸支局『兵庫百年夜明けの人びと』、神戸新聞出版センター『兵庫県大百科事典下』、徳山宣也『大洋漁業捕鯨事業の歴史』、大日本水産会『水産偉人伝～大資本漁業の基礎を築く～中部幾次郎』を参考にした。

中部幾次郎の略歴年表は次の通り。

中部幾次郎年表(大仏次郎編『中部幾次郎』より抜粋)

年	年齢(歳)	出来事
慶応2年	1	播磨国明石東魚町で兼松、みつの6人兄弟の次男として生まれる。
明治6年	8	兄甚蔵の死去により相続人となり家事の手伝いを始める。
明治14年	16	四国九州方面へ魚の買出しに従事し、大阪雑喉場へ搬入する。
明治17年	19	こまと結婚
明治37年	38	第5回内国勸業博覧会で運航された巡航船を運搬船に利用することを考え研究に没頭する。
明治37年	39	下関に根拠を置く。
明治38年	39	我国最初の石油発動機鮮魚運搬船を建造し近海で活動する
明治43年	45	慶尚南道方魚津に根拠を置く。
大正2年	48	下関市竹崎町に本店を構築。長男兼市が常駐。
大正4年	50	方魚津を朝鮮漁業の本部と定めるが、コレラや不漁により倒産危機に。
大正5年	51	下関市に中部鉄工所を創設。
大正7年	53	土佐捕鯨を買収し、捕鯨業にも進出。
大正11年	57	我国初のブライン式冷蔵庫を下関市彦島に建設。
大正13年	59	個人経営であった事業を株式会社組織に変更。
大正14年	60	方魚津の本拠を下関に移し、下関に移住する。
昭和11年	71	下関市本社を新築。大洋捕鯨を創立し、南氷洋捕鯨に進出。
昭和21年	81	戦後の小笠原捕鯨、南氷洋捕鯨に道筋を付け、死去。

- (5) 1929(昭和3)年11月1日に明石市議会が中部幾次郎の業績をたたえた寿像を明石公園前に建設したが、戦時中金属回収で供出され、1952(昭和26)年に再建された。

- (6) 現在の大阪中央卸売市場。林兼の商標であった㊦は雑喉場での取引の符牒として魚問屋「綿末」が使い始めたと言われている。旧林兼商店の店舗があった東魚町14番地からは、林兼の会社名が入った木札が見つかっている。
- (7) 大仏次郎『中部幾次郎』、中部幾次郎翁伝記編纂刊行会、1958年、41頁参照。
- (8) 明治22年に「日本韓国両国通漁規則」が調印、23年1月に公布施行され朝鮮通漁の基準が明確になり通漁はこの規則の範囲で行われるようになった。41年10月には「日本韓国漁業に関する協定」が締結され、22年に調印された「通漁規則」は廃止された。『日韓漁業対策運動史』日韓漁業協会、1968、19頁。
- (9) 韓国併合の詔書が發布されたのは明治43年（1910）年8月29日。それから35年間にわたる日本の朝鮮統治が行われた。『日韓漁業対策運動史』、18頁。
- (10) ほうぎょしん、ハングル読みでパンオジン。現在の大韓民国蔚山広域市付近。
- (11) 下関の旅館業、篠崎利三郎の斡旋によると言われている。大仏次郎、203頁参照。
- (12) 志野徳助については、岸本充弘『昭和十五年／十六年度漁場日誌』に見る戦前の南水洋捕鯨について—中部利三郎資料より—（前編）」北九州市立大学大学院社会システム研究科『社会システム研究』第10号所収、2012年、101頁、脚注（2）参照。『明石ゆかりの人々』173頁、『海翔ける』19頁にも関連の記載がある。
- (13) ㈱林兼商店・資本金500万円、林兼漁業㈱・資本金300万円、林兼冷蔵㈱・資本金200万円：翌大正14年にはこの3社を合併し㈱林兼商店とする。当時、鮮魚部、漁業部、水産物冷蔵部竹輪部など13事業部があり、鮮魚部所属鮮魚運搬船53隻（3,600トン内9隻の冷蔵船）、漁業部所属手繰り船等116隻（7,000トン）、トロール船等59隻や冷蔵庫、工場等を設置し、事務員・技術員200名、船員2,230名、工場職工740名、漁夫4,550名を擁し、共同漁業、日魯漁業と合わせた3大漁業会社体制が確立された。
- (14) 日新丸は費用約800万円、現在の約80億円を投入し昭和11年2月から7月末までの156日間に1万数千人を動員して神戸川崎造船で建造。『明石ゆかりの人々』173頁参照。
- (15) 廣瀬始に関する聞き取りは、平成26年8月8日（金）に兵庫県明石市廣瀬様自宅に於いて実施。
- (16) ヨシさんは昭和42年3月22日に72歳で死去。
- (17) 水産界を海洋漁業と沿岸漁業に二分し、それぞれに統制機関を設けることで漁業会社を政府の統制下に置くというもの。国家総動員法に基づく戦時法規であった。ニチレイ温故知新（第1回）日本冷蔵の誕生、㈱ニチレイHP参照。
- (18) 藤本亮助『兵庫縣近世五十傑傳』、1931、216頁。
- (19) 大仏次郎、81頁参照。

(参考文献)

- ・岸本充弘「下関における鯨産業発達史」下関市立大学大学院経済学研究科修士論文、2002年。
- ・岸本充弘「関門地域における鯨産業・鯨文化形成メカニズムの一考察 - その将来展望を視野に入れて -」北九州市立大学大学院社会システム研究科博士論文、2006年。
- ・伊地知紀子『大洋漁業と朝鮮』、『歩いて知る朝鮮と日本の歴史 兵庫のなかの朝鮮』所収、兵庫の中の朝鮮編集委員会、2001年。
- ・大仏次郎『中部幾次郎』、中部幾次郎翁伝記編纂刊行会、1958年。
- ・岸本充弘『関門鯨産業文化史』海鳥社、2006年。
- ・高浜直子『海翔ける中部幾次郎』、明石大門31所収、明石ペンクラブ、2011年。
- ・徳山宣也『大洋漁業捕鯨事業の歴史』徳山私家版、1992年。
- ・藤本亮助『兵庫縣近世五十傑傳』、藤本私家版、1951年。
- ・『明石市史下巻』、明石市役所、1970年。
- ・『明石ゆかりの人びと』、財団法人兵庫県学校厚生会、1999年。
- ・『郷土百人の先覚者』、兵庫県教育委員会、1967年。
- ・『新明石の史跡』、あかし芸術文化センター、1997年。
- ・『水産偉人伝～大資本漁業の基礎を築く～中部幾次郎』大日本水産会、水産会8月号所収、2013年。
- ・『大洋漁業』、展望社、1959年。
- ・『大洋漁業80年史』、大洋漁業、1960年。
- ・『中部翁畧傳』、明石市教育會、1941年。
- ・『日韓漁業対策運動史』日韓漁業協会、1968年。
- ・『兵庫県大百科事典 下』神戸新聞出版センター、1983年。
- ・『兵庫百年 夜明けの人びと』朝日新聞神戸支局、1967年。
- ・『歴史と神戸』第19巻第4号、神戸市学会、1980年。